

卒業論文（指導教員：久野マリ子教授）

男性による女性語使用についての研究

國學院大學第 119 期 8 組 20 番
中村明裕

目次

・はじめに	1
・第1章 いわゆる「オネエ言葉」について	3
・第1節 「オネエ言葉」とその歴史	3
・第2節 恋愛上の戦略としての女性語	10
・第3節 男性が女性語を使用するとき特有の現象	13
・第4節 なぜ女性の男性語使用はないのか	19
・第2章 明治後期——『女装の探偵』を通して	22
・第1節 作品について	22
・第2節 分析	27
・第3章 昭和前期——『エロ・グロ男娼日記』を通して	41
・第1節 作品について	41
・第2節 分析	45
・おわりに	59
・第1節 今後の展望	59
・第2節 まとめ	62
・註	64
・参考文献	65
・参考資料	66

はじめに

日本語に男女の性差があることは広く知られている。『国語学辞典』の「女性語」の項（永野、1970）には、次のように述べられている。

男性の言語と比べた上で認められる女性特有の言語。**婦人語**とも。女性の間にかわさる言語でなく、女性の立場から用いられる言語と見るべきである。世界の諸言語の中で、日本語は特に男性語（別項）と女性語との差が著しいと言われる。

もつとも、日本語における男性語と女性語は、さほどはっきりと分けられるものではない。任利（2009）は次のように述べる。

- a. 女性の言葉遣いと男性の言葉遣いは、対極的存在ではない。
- b. ある言語表現における性差の表れは、程度としての女性性・男性性の強弱によるものである。
- c. 女性・男性による性別の差というより、女性性・男性性の度合いの差と言えるものである。
- d. 話し手の女性性・男性性の表出は自己表出意識、対話ストラテジー、社会通念、ジェンダーステレオタイプなどによって多様に実現される。

(44 ページ)

任は、男性語と女性語の関係は二項対立的なものではなく、相対的なものであると指摘

した。すなわち、ある表現を使用するのが男性か女性か、もしくは両方かとはっきりと分ける捉え方を排し、極度に男性的な表現から極度に女性的な表現までの間は虹のように無限に分けられるとしたのである。

任によれば、日本語において、より女性的とされる表現はより優しい表現である場合が多いという。しかしながら、女性語すなわち優しい日本語であるとするわけにはゆかない。たとえば、女性専用の形式と言うべき「アタイ」と男性専用の形式と言うべき「ボク」とを比べてみれば、後者のほうが丁寧で優しげであろう。また、一例を示すなら、1978年の山口百恵の歌謡「プレイバック Part 2」（阿木燿子作詞）には「馬鹿にしないでよ そっちのせいよ」という歌詞があり、これは明らかに女性専用の形式を使用しているが、全く優しげではない。

日本語には、優しさなどを表すために女性に使用される傾向のある語、勇ましきなどを表すために男性に使用される傾向のある語とは別に、単にある程度性別を表示するのに使用される形式があるとすべきであろう。そしてここでは、その内自分が女性であることを示す形式を「女性語」、自分が男性であることを示す形式を「男性語」と呼んでおく。

ところが、形容矛盾のようであるが、その女性語を男性が使用する場合がある。それはもちろん優しさなどを表現するためではない。事情があつて女性になりすまさなければならぬ場合や自分を女性的に見せて同性の気を引こうとする場合などに、男性でありながら自らの女性性を表現するために使用するのである。

本論文は3章からなる。第1章ではいわゆる「オネエ言葉」などを観察し、現代の男性がなぜ、どのように女性語を使用しているかを明らかにする。第2章では明治後期の小説

『女装の探偵』を、第3章では昭和前期の小説『エロ・グロ男娼日記』を資料として、それぞれ明治後期と昭和前期の男性の女性語使用がどのようなものであったかを明らかにする。

第1章 いわゆる「オネエ言葉」について

第1節 「オネエ言葉」とその歴史

第1項 「オネエ言葉」についての先行研究

a. 『日本俗語大辞典』

男性の女性語使用の内、広く知られているものに俗に「オネエ言葉」と呼ばれるものがある。『日本俗語大辞典』（米川、2003）では、オネエ言葉を次のように定義している。

おねえことば（お姉言葉）[名]男性が使う女性語または女性的な物言い。おかまが使用。◇『地下鉄の穴』「二丁目」の夜は更けて（2002年）〈泉麻人〉「オカマバー（いわゆるオネエ言葉を喋る最もポピュラーなおカマの店）」

b. 河野礼実

この「オネエ言葉」については河野礼実（2008）が詳細に検討している。河野の論文の内容を簡略に纏めると、大体次のとおりである。

- ・TVにおいて「オネエ」と呼ばれる男性たちによる女性語の多用が見られる。それは「オネエ言葉」と呼ばれる。
- ・5つの番組の合計12人の人物の言語形式を分析した。その結果は次のとおりである。

- ・一人称は「わたし」「あたし」「わたくし」が主で「ぼく」「おれ」などの男性専用形式は見られない。
- ・二人称は「あんた」「あなた」が主である。
- ・呼称は「名前+ちゃん」が主である。
- ・感動詞には「ちえ」「くそ」「おい」などの男性専用形式が見られない。女性専用形式である「あら」「まあ」は使用される。
- ・文末形式には「わ↑」「わね」「わよ」、「ダメだよ」でなく「ダメよ」とするなどの女性専用形式が見られる。男性専用形式である「ぜ」「ぞ」「な」「わ↓」は現れない。女性専用形式でも「てよ」「こと」「もの」「かしら」は見られない。
- ・文末には母音の引き延ばしが見られる。
- ・毒舌な表現が見られる。
- ・美化の接頭辞「お」「ご」が使用され、「食う」ではなく「食べる」と言うなど美化語を用いる。
- ・女装をしている者もいるし、男性的要素の強い者もいる。足を広げる者は少ない。笑うときに口元を手で隠す。
- ・次のようなことが考察される。
 - ・「オネエ」は女性形式を使用するが、一方で聞き手は女性的でない毒舌な表現を期待している。男性形式は聞き手に期待されていない。男性表現を一種のストラテジー（戦略）として使用することがある。
 - ・「オネエ言葉」は「役割語」である。彼らの「オネエ言葉」の使用は、女性になりき

ることではなく、「女性に関心を持つ分野を女性に教える」などの役割を示すことを目的とする。

- ・自らのジェンダーを表現するためだけに女性語を採用しているわけではない。

c. 小林千草

小林千草の『女ことばはどこへ消えたか?』（2007）は時代を遡って女性語の変遷を詳細に検証しているが、この中で小林は8ページ弱を「ニューハーフのことば」に宛てている。小林は「現代もっとも女らしい女ことばを使う人といえば、「ニューハーフ」（279ページ）であるとしている。小林は『Ray 八月号』（2001年、主婦の友社）や多田かおるの漫画『デボラがライバル』（1987-1987年発表）を取り上げ、「～よね」「～わね」「～わよ」「～かしら」「～じゃないの」といった文末形式などの特徴を指摘したうえで、お嬢様言葉の「～てよ」は使っていないだろうとしている。

しかしながら、小林は「少し前は「ゲイ」と言い、一時、「ニューハーフ」ということばでくられた人たち」（279ページ）と言っており、ニューハーフとゲイを多少混同している嫌いがある。ニューハーフとゲイは根本的に別のものである。多くのニューハーフや女装者など、自分を（女性的な**男性**ではなく）**女性**として見せようとしている人々は、それほど「女らしい女言葉」を使うわけではないからだ。そのことについては三橋順子（2008）が述べている（後述）。

d. 金水敏

金水敏（2003）は「役割語」を次のように定義している。

ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢・性別・職業・階層・時代・容姿・風貌・性格等）を思い浮かべることができる、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。

(205 ページ)

金水は、江戸期から現代に至るまでの作品における女性の言葉遣いの変遷を調査している。そのうえで、「てよ」「だわ」に代表される、漫画などでお嬢様風のキャラクターが使用する形式は現在、標準語の位置から滑り落ち、役割語の一種となっているとしている。そして、男女の言葉遣いの差が減少しても社会に「男性語」「女性語」の智識が共有されている以上、作品を通して子供たちへの刷り込みが重ねられているとした上で、男性の女性語使用について次のように述べている。

また、個々の話し手も、^{ベルソナ}仮面の一部として〈男性語〉〈女性語〉を用いることがある。いわゆる「おかま」とか「ニューハーフ」とか呼ばれる人たちが、ことさらに女性専用表現を多用することもあるのも、^{ベルソナ}仮面としての役割語を駆使している一例といえよう。

(173 ページ)

e. 三橋順子

さて、性社会史研究者の三橋順子は『女装と日本人』（2008）の中で、女装者が女性として扱われるための方法を述べているが、その中で「「おねえ言葉」は使わない」と題し、次

のように述べている。

次にしゃべり方。これもよく誤解されることですが、女装者のコミュニティでは、ゲイ・コミュニティで多用される「おねえ言葉」つまり、女性性を過剰に誇張した言葉は使いません。

「おねえ言葉」というのは、部外者にはなかなか再現が難しいのですが、例えば、「あっら～あ、〇〇さん、おひさしぶり～い。お元気だった～あ。やだわ～あ、もうちょっとおまめにいらしてねえ」みたいなしゃべり方です。こういうしゃべり方をする女性は、現代ではきわめて稀です。私なら「あ、〇〇さん、おひさしぶりです。お元気でした？でも、もう少しまめにいらしてくださいね」というしゃべり方になります。

(286-287 ページ)

この記述は、「オネエ言葉」には過剰なまでの女性語の使用や母音の引き伸ばしがあるという点で河野の説と一致する。その後三橋は、以下のような事実を報告している。

- ・「いつもそんなしゃべり方なんですか」と問われて「いつもそんな女っぽいしゃべり方なんですか」の意かと思ったら「いつもそんな（オネエ言葉）ではない男っぽいしゃべり方なんですか」の意であった。
- ・三橋以上に女性的でない話し方をする女装者も多い。
- ・女装バー「ジュネ」では「オネエ言葉」を使っていた女装者に常連の男性客が「そのべたべたした気持ち悪いしゃべり方、やめてくれよ。ここは二丁目^{*1}じゃないんだからさ」とクレームをつけたことがある。

・ゲイ・コミュニティでは「ノンケ」*²の男性と差異化を図って「オネエ言葉」が先輩から後輩へ継承されるが、女装者の世界では「純女」*³の言葉づかいを手本とする。

第2項 「オネエ言葉」の歴史

それでは、この「オネエ言葉」はいつごろから使われはじめたのであろうか。「オネエ言葉」という単語自体は『日本国語大辞典』（第二版）には載っていない。当然『大辞泉』『大辞林』などの中型辞典にも載っていない。『隠語大辞典』（木村、2000）も漏らしている。辞書類で「オネエ言葉」を載せているものは『日本俗語大辞典』（第一項 a. 参照）が最古と見られる。

『日本俗語大辞典』に載せられた用例より古いものとしては、「オネエ言葉の逆作用」（伏見、1995）が指摘できる。このエッセイの中で伏見は、講演でオネエ言葉を使って辛辣なことを言い、学生たちから批難された話を書いている。伏見は「オネエ言葉を喋るゲイではあるが、見た目は女装をしているわけではないし、ちっともオンナっぽくはない。ただの太ったオッサンだ」（56 ページ）と述べていて、相手に自分のことを女性だと思わせるための女性語使用でないことは明白である。

「オネエ言葉の逆作用」と近い時期に出版された『女装の民俗学』（礫川ら、1994）では、1928年に起きた殺人事件の犯人、女形俳優の車次久一を紹介する。礫川らは、車次が軍国主義が高まっていた時代に「男性原理に完全に屈服した」（128 ページ）と指摘し、次のように述べる。

翻って今日の日本を見ると、ピアスをした少年や髪を後ろに束ねたオジサンが街を

堂々と歩いている。テレビをつけると、女性言葉の評論家やら、女装(?)の歌手、作家などがその存在をアピールしている。一九九二年暮の紅白歌合戦のフィナーレでは、女装した華奢な体のアーティストの演奏するピアノに、出場者全員が楽しく唱和していた。

何という平和な時代だろうか。こうした時代がいつまで続くのだろうか。人々が自らの「浅間しい体」を責め悲しむ時代が、再び来ないことを祈るのみである。

(128 ページ)

ここで「女性言葉」とされているのは、いわゆる「オネエ言葉」に類するものであると見ていいだろう。その評論化が女装であるとは書いておらず、単に言葉遣いだけを書いてあるから、男性の姿で女性語を使っていると見ていいと思う。

三橋(2008)によれば、「ニューハーフ」という言葉が誕生したのが1981年のことである(213 ページ)。そして、1992年以降、ニューハーフはTVを通じて「お茶の間に浸透」(219 ページ)することになる。完全な女性を目指すニューハーフと、男性でありながら女性的な表現をする人とは重ならないが、当時は、これらが別のものであるという認識はあまり広く共有されてはいなかったであろう。これらは今でもしばしば混同される。このころから性的少数派が一躍して注目を浴び始め、それにしたがって「オネエ言葉」も広く認識されるに至ったものであると考えられる。

もっとも、「オネエ言葉」に類するものはそれ以前から存在したと思われるが、性的少数派が広く認知された存在でなかった以上、それ以前の資料からは見つけにくいであろう。

しかし、それ以前にも「オネエ言葉」とは別の形で男性による女性語使用を見出すことができる。それについては第2章以降に述べる。

第2節 恋愛上の戦略としての女性語

第1項 男性に魅力的に見せるための女性語

河野（2008）によれば、「オネエ言葉」が使用されるのは「女性に関心を持つ分野を女性に教える」などの役割を果たすためであり、女性になりきることを目的とはしない（102ページ）。一方、本稿の第2章以降に述べるとおり、男性が女性になりきることを目的として女性語を使用する場合がある。さらに、女性語は男性によって、恋愛上の戦略として使用されることがあると考えられる。

「ノンケにモテる方法、教えます」^{*4}と題されたWWW上の記事には、同性愛者の男性が異性愛者の男性^{*2}を誘惑する次のような方法が述べられている。

昔、「ノンケ食いの名人」と呼ばれる人を知っていました。

彼は女装こそしていませんでしたが、男の子をナンパするときには徹底してオネエ言葉で通していました。

（中略）

男の子の方は彼が徹頭徹尾オネエ言葉をしゃべるもんだから、つい女を相手にしているような気分になって油断して、気がついたら唾えられていた、ということになるみたいです。

女性語を使うことによって自分を女性的に見せ、異性愛者の男性を誘惑するという方法である。もっとも、このような方法が同性愛者の男性の間でどれほど用いられているかは

わからない。というのも、わざわざ WWW 上で公開するからには、この方法が同性愛者の男性に、実際にはあまり広く知られていないだろうとも考えられるのである。

男性を恋愛の対象とする者はより男性的な者を求め、女性を恋愛の対象とする者はより女性的な者を求めることがある。普段男性を恋愛の対象としない者であっても、男性的な男性より、女性的な男性のほうが拒否感が薄いはずである。そのため、以上のような戦略が取られるのである。

逆に、同性愛者の男性ならば、女性的な男性には拒否感を持つ場合がある。したがって、同性愛者の男性が同性愛者の男性に対して自分を魅力的に見せようとする場合には、もちろん、このような戦略は無意味であり、あまり使用されないだろう。それを示すわかりやすい例が『女装の民俗学』（礫川ら、1994）に紹介されている。それはゲイの雑誌『薔薇族』（1993年10月号）と女装趣味の雑誌『くいーん』（1993年10月号）である。礫川らは、『薔薇族』のメッセージ欄の中に女装に関係したものは3通しかない（14ページ）としてその3通を紹介している。そのうち1通は「男妻」を求める（すなわち男役の）のメッセージであり、もう2通が女役のメッセージである。その女役の2通の内1通は

「国立市・女装っ子 ノンケの彼氏&パパ募集中です。週末になると部屋で女の子してる私をやさしく可愛がって下さい。背が高いのが悩みです。29歳、174センチ×70キロ。巨根の方に憧れています。超ミニスカの私を抱きしめて下さい」

（14-15 ページ）

というものであり、いくらか女性的であるが、女性専用形式を使用しているわけではな

い。もう1通は

「笠岡氏・心の支え 年上の優しい人と親子の様で夫婦みたいに一緒に暮らす事を願っている僕は167センチ×52キロ、妻として愛されたい童顔の25歳です。色白の綺麗な体で家庭的な僕は、自慢の手料理や身の回りのお世話をして健康にも気遣い安らぎを大切に末長く幸せに暮らしたい。年齢不問」

(15 ページ)

というものであり、男性専用形式である「僕」を使っている。メッセージの内容から察するに、このメッセージを送った人はかなり女性的な性向を持っているのだろうが、『薔薇族』という雑誌の性質上、自分を女性的に見せることはかえって損だと考えたのであろうと考えられる。

第2項 異性愛者の女性が異性愛者の男性に求愛するための女性語

さて、このような戦略は同性愛者の男性だけが駆使するのではない。むしろ、男女の恋愛の駆け引きの材料として一般に男性語・女性語が用いられているのを、同様に同性愛者も用いていると見るべきである。そのためには、性愛の観点から同性愛者の言語にのみ着目するのではなく、性愛の観点から異性愛者の言語に着目する必要がある。ともすれば我々は、異性愛者の言語に性愛が影響することを見逃しがちである。

D. Cameron ら (2009) は、ウィリアム・リーブの「一般的な社会理論は異性愛と同性愛の視点を同じ分析パラダイムにたんに合体させることはできない。そうすることは、同性

同士の経験を異性愛の規範の権利下に従属させるだけだ」(278 ページ) という論に反対し、次のように述べる。

(前略) どうやらリープは、明らかに、もしくは当然のことながら異性愛規範に焦点をあわすことは、ゲイ男性とレズビアンの特徴から注意をそらすと感じているようだ。しかし、私たちは、これこそが重要だと考える、なぜなら、ゲイ男性とレズビアンの経験を形づけるのは結局異性愛規範性からである。その生活をよりよい方向へと変えるためには、彼女あるいは彼らの経験を異性愛規範的なものと比べ比較的価値のないものとする制度に抵抗することが必要だからである。

ゆえに、私たちにとって、異性愛規範性を批判的に批評することは政治的に重要である。そして、私たちは、研究者に「同性同士の経験」と並べて異性愛を考察することを要請する。男性性と女性性と同様、異性愛と同性愛は互いに対比されることで定義される関連した用語である。同性愛者なしでは異性愛者は存在しないし、その逆もそうだ。

(後略)

(279-280 ページ)

Cameron らの政治的信条はさておいて、同性愛における言語上の駆け引きは、異性愛における言語上の駆け引きと同じ土俵にあるとみるべきである。

第3節 男性が女性語を使用するとき特有の現象

吉住渉の漫画『ミントな僕ら』には、女子生徒になりすます中学生の男子「のえる」が登場する。この漫画には次のような会話がある^{*5}。

のえる 「んー/そうだな/**おれ**は…」

” ([はっ])

” (しまった)

” (女コトバ/ちゃんと練習/してあったのに)

” (まずい!!)

” 「あ…/おれって言うの/口グセで…」

” 「な 直そーと/思ってんだけど/なかなかさ～」

” 「[あはは…]」

” (うっ…/バレバレ!?)

女子生徒 1 「やだー/男みたい」

女子生徒 2 「似合わなーい」

男子生徒 「品がないぞのえる」

(第 1 巻・36 ページ)

また、やぶうち優の漫画『少女少年 III—YUZUKI—』には、女子になりすましてアイドル活動をする小学生の男子「柚季」が登場する。この漫画には、柚季と同じアイドルグループの少女「ユリ」との会話の中に、次のような台詞がある*6。

柚季 「オレ…[おっと/やべーi]/あ…あたしだって/不安だよ。」

” 「東京なんて/初めてだし、/こんな都会に/ひとりっきりで…。」

” (しかも女のふり/しなきゃ/なんないし…。i)

(66 ページ)

以上の二つの例は、自分が女性になりすましていることを忘れて、うっかり男性専用形式を混ぜてしまっている。

また、東村アキコの漫画『海月姫』には、女装した大学生の男子「蔵之介」が登場する。蔵之介が主人公「月海」の住むアパートに訪れるシーンには、次のような会話がある。蔵之介が男であることを月海以外の入居者たちは知らず、月海の住むアパートは男子禁制である。

蔵之介 「オレ ゆうべは/ここの場所 よく/わかってなくてー」

入居者たち 「オレ?」

月海 「〜〜っ!!!」

(第1巻・72 ページ)

このシーンではその後、月海が「ランランランララ/ランラランララ/ランラランララ/ランラランララ/ランラランララ/ランラランラン/オレッ! ☆」(73 ページ) と、「トレロ・カモミロ」(F・マレスカ作詞、阪田寛訳詩、M・パガーノ作曲) を歌ってごまかしている。またその後のシーンで、月海が蔵之介を廊下へ連れ出し、次のような会話をしている。

月海 「お……」

” 「お願いですから/帰ってください/……」

擬態語（月海、蔵之介に土下座） 「[ふかぶか]」

蔵之介 「いーじゃん/女のカッコで/来てんじゃん」

〃 「男ってバレなきや/問題ないでしょ」

月海 「じゃあ「オレ」って/言わんでください」

擬態語（月海、落涙） 「[だばー]」

蔵之介 「え？」

〃 「オレ そんなこと/言ってた？」

月海 「今も言いました」

(第1巻・75ページ)

また、その後も蔵之介は一人称「オレ」を使うのをやめない。

蔵之介 「千絵子さん/着せてあげてよ」

〃 「オレ 着付けは/さすがにわかんな」

擬音語（月海、蔵之介を突き飛ばす） 「[どん]」

月海 「オ・レ!!!」

擬態語（月海、落涙） 「[だばー]」

蔵之介 「ちょ…/いたいいたい」

月海 「「オレ」はやめて/ください/っっっっ」

(第1巻・169ページ)

以上の例も自分が女性になりすましていることを忘れて男性専用形式を混ぜてしまって

いるが、「トレロ・カモミロ」でごまかすことができていることからわかるとおり非現実的なギャグシーンではあろう。

とはいえ、漫画ではこのような例がときどき見られることから、特に漫画の作者や読者には、女性になりすます男性が女性語を使用しようとする場合に誤って男性専用形式が混入してしまうことはどちらかといえば現実的であると考えられていようと思う。

それでは、実際に男性が女性語を使う場合でも男性専用形式が混入するのであろうか。河野（2008）はテレビにおける男性の女性語使用を観察して次のような用例（TBS「ピンポン!」）を指摘している。

(8) A :築地って言ったらあれ**だ**ろうね。

女性1 :あれだろうね。男に戻ってるよ、今。

A・女性1:〈笑い〉

女性1 :あれよね。

(103 ページ)

似たような現象は私もテレビで見たことがある。たとえば2008年11月4日に日本テレビで放送された「おネエMANS」という番組では、はるな愛氏が「**僕**負けそう」と発言していた。しかしこれは女性お笑い芸人のバービー氏が化粧して美しくなったのを見て言った冗談であり、普段から「僕」という一人称を用いているわけではない。この現象について、河野は次のように述べている^{*8}。

ここでは、男性形式「だろう」をAが使用したことに対して、女性1が「男に戻っているよ、今。」と指摘を行い、さらに「あれよね」という訂正案が述べられている。このことから受け手である女性1が期待していた文末形式は「だろうね」ではなく、「よね」であったということが判断できる。すなわち、男性としての男性形式の使用は期待されておらず、その使用は受け手にとって違和感の残るものであったのだ。Aの「あれだろうね。」という発話は、女性1が持つ「Aの言語使用イメージに反するものであり、彼女の〈期待〉を裏切るものだったのである。

(中略)

データ内には稀にはあるが、オネエたちがそれまでの女性語使用から一時的に男性語使用へと切り替える現象が見られた。Jによる「うめえ!」、Kによる「ばか、どこ、どこのあほがね」という発話が観察場面中にあった。(8)のように男性語使用に受け手が違和感を唱える場面があった一方で、これらは自らの感情を強調させるという表現効果を期待して、すなわちオネエというキャラクターを活かし、男性語を一種のストラテジーとして使用していた。

(103-102 ページ)

すなわち、こうした男性語の使用はうっかり出てしまうものではなく、「ストラテジー」すなわち戦略として意図的に使用されるものなのである。特に、外見からして女装していてもいない、すなわち、女性になりすます気もない人でもそうなのだから、女性の姿になっている人物がうっかり男性語を使うということは考えにくい。漫画でこの現象がしばしば見

られるのはある程度ヴァーチャルなものであろう。

それよりも実際には、第1節第1項で紹介した河野（2008）らの説のように、過剰に女性性を意識するあまり、女性専用形式の過剰な使用がなされると見るべきである。

第4節 なぜ女性の男性語使用はないのか

第1項 諸言語における男性の女性語使用

さて、本節では視野を拓けて、諸言語における男性の女性語使用についても少し考えてみたい。多くの言語で、男性は女性語を使用する。しかし女性が男性語を使用することはあまり観察されない。同性愛者によって、フィリピンでは *swardspeak*、イギリスでは *Polari* というスラングが使われており、ブラジルにも同じようなスラングがあるという (Cameron ら、2009 176-177 ページ)。

現に、ゲイの男性が使う女性語を我々は「オネエ言葉」と呼び、この語は俗語辞典にも掲載されているが、「オネエ言葉」の逆を意味する単語は少くとも私の知る限り日本語にはない。このことも女性の男性語使用が見られていないことの証左となろう。

その原因について、Cameron らは、「ゲイ男性はジェンダーよりも性的なものを優先させ、レズビアンはその逆」⁹⁹ であるとするアーノルド・ツヴィッキーの説を批判し、次のように述べる。

(前略) レズビアンとゲイ男性は (アイデンティティの形式に対する各自の指向はどうかあれ)、ジェンダー越境が対照的になされるわけではない。男らしさと女らしさは対称的なものではないからだ。家父長制社会において、男らしさは「無標」のジェンダーと

して文化的に解釈され、一方、女らしさは「有標」となる。(中略) 社会的に、そして言語的に無標から有標へと越境する方が逆の場合よりも目立つ。パンツをはいている女性とドレスを着た男性は同じことを表明しているわけではない。また、より無標のものを、女らしい言葉づかいを意識的に避ける女性は、女らしい特徴をわざわざ会話で用いる男性と同じではない。彼のジェンダー逸脱は彼女のそれより目立つものになるだろう。(中略) つまり、文化的カテゴリーかステレオタイプとしての「男ことば」は「女ことば」より目立たず、その特徴が細かく決められていないのだ。多分、これが言語のジェンダー越境によってもたらされる資源が(何人かの)ゲイ男性には有効であるが、レズビアンには何ら意味がないことの理由かもしれない。

(187 ページ)

すなわち、Cameron らによれば、女性の言語形式が有標であり、男性の言語形式が無標であるために、男性が女性の言語形式を用いれば目立つが女性が男性の言語形式を使用しても目立たないというのである。

第2項 男性の女性語使用が目立つ理由

しかし、Cameron らの説には従いにくい。日本語においては、男性の言語形式が有標であり女性の言語形式が無標である部分もあるためである。一人称「おれ」「ぼく」が男性専用である一方、「わたし」は男女どちらが使っても違和感がない。「だぜ」などの文末形式もまた男性専用である。Cameron らの説は英語におけるこの問題には有効な答えとなりうるが、日本語におけるこの問題に対する有効な答えとはなりにくい。

それでは、なぜ男性の女性語使用はあって女性の男性語使用はないのか。それは、言語

形式自体に原因があるのではなく、社会的な要因が強いように思われる。この現象の原因は、社会的な性の制約が女性よりも男性に強く働くことであるように思われるのだ。たとえばニューハーフのファッションモデル椿姫彩菜は自伝の中で次のように述べ、女性から男性への逸脱よりも男性から女性への逸脱がより厳しく働くことを証言している。

れいなちゃん^{*10}がいくら男っぽくても、男みtainな言葉遣いをして、空手の段を取るような武道家であっても、周りからは女の子と認識される。「女」であることがうらやましくてしかたなかった。その差は何なんだろう？ 何で私は誰も「女」って認識してくれないのかって。

答えはわかっている。でもどうしようもない……。

だいたい、みんなの反応は、女の子でボーイッシュなのは全然 OK、許されるんだけど、男の子のガリーッシュはキモイで終わるんだよね。

結局、自分の肉体をうらむだけ。

(椿姫、2008 115-116 ページ)

Cameron らは、多くの言語で男性が女性語を使用する一方で女性が男性語を使用することは観察されないと報告する。ならば本当に女性は男性専用とされる言語形式を使用しないのか。否であろう。女性も「僕」「俺」などの一人称や「だぜ」などの文末形式を使用する。事実、女性による男性語の使用が全く観察されないというわけではない。たとえば佐藤響子 (2010) は、東野圭吾の『片想い』(2004) の中で、幼少期から女であることを受け入れられなかった日浦美月という登場人物が「オレ」と自称し、男性特有の表現を多用

することを指摘している（118-119 ページ）。

女性が女性性から逸脱し、男性のように振る舞ったとしても、それは必ずしも批難されることではない。それゆえに女性の男性語使用は、ないのではなく、見えにくいのである。言語の形式が有標であるか無標であるかではなく、社会的な性のあり方が男女で非対称であることが、このような現象を起していると考えられるのである。

第2章 明治後期——『女装の探偵』を通して

第1節 作品について

第1項 本作品を取り上げる理由

本章では山田美妙の小説『女装の探偵』を資料として、明治後期の男性の女性語使用を分析する。本作は前篇 43 章、後篇 38 章からなる。

本作品の主人公は女装してスパイ活動をする。そのため主人公には女性になりすます必要があり、そのために女性的な言語の運用が行われるであろうと考えられることが本作品を取り上げる理由である。また、明治期は男女のジェンダーが極めてはっきりと分化しはじめた時期であると考えられる。女装して女性になりすます男性が登場する作品の古いものには中世の『とりかへばや物語』などがあるが、現代の男性語・女性語と直接のつながりを見いだすことは容易ではない。また、著者の美妙は東京の生まれであるから、地域方言の影響はあまり気にしなくてよいと考えられることも理由の一つである。近代以降の作品であっても夢野久作の小説『犬神博士』の主人公などは方言色が濃く、会話文がどのくらい女性的か見極めることは容易でない。

第2項 作者・成立・諸本

『女装の探偵』は山田美妙（1868（慶応4）～1910（明治43））の小説である。美妙は言文一致体の先駆者であり、『日本大辞書』の編纂でも知られる。

『美妙選集 下巻』の巻末の「著作年表」によれば、『女装の探偵』が発表されたのは1902（明治35）年1月である。

『慨世志士 女装の探偵』（前後2冊）として1902（明治35）年に青木嵩山堂から出版された。その後少なくとも1910（明治43）年に重版されている（早稲田大学図書館、1996）。

1935（昭和10）年の『美妙選集』にも収められている。『美妙選集』では変体仮名を通用の仮名に改め、ルビを大幅に削り、序文を削っている。連続した四段落が完全に抜け落ちている部分があるなど、誤脱が多い。最も珍奇な誤植は朝鮮人になりすました主人公が清国兵に捕まり、シナ語の発音の訛りから日本人ではないかと疑われるシーン（後篇「其三十七」）であろう。明治35年の単行本には主人公の発言に「御承知の如く私は清国人でも無し」とあるが、昭和10年の選集本ではその部分を「御承知の如く私は韓国人でも無し」と誤植しており、自分の正体を清国兵に明かしてしまっている。他にも本文にいくらか異同があるようであるが未調査である。

本調査では、先述の理由から最善の本文を持つと思われる明治35年の単行本を使用し、必要に応じて昭和10年の選集本を参照した。

第3項 主な登場人物

本調査では一人称代名詞を調査の対象とするため、以下には一人称代名詞を含む会話文

のある人物を全て挙げた。実在の人物には括弧内に生没年を示した。

a. 日本人

矢部道任 やべみちとう 主人公。美少年の書生。金玉均の配下の軍事探偵として日本、朝鮮、清で女装して暗躍する。

李朴 日本人であるが清国人になりすまして軍人となり、機密情報を日本や金玉均に漏洩する。

奈良大尉 陸軍大尉。矢部を補佐する。後に軍を辞し、朝鮮で東学党の乱に参加する。

小田吉数 商人。朝鮮で東学党の乱に参加する。

島田糸子 金玉均の依頼で矢部を補佐し、女装の術を教える。

秋子爵 陸軍少将。金玉均と矢部に協力する。

良家の妻女 矢部が李朴に会いに清に渡る途中に汽車で同席する。

秋子爵の妾 金玉均が試しに矢部を見せるが、矢部が男であることを見抜かない。

漁師 金玉均に身を寄せさせてもらおうと考えている矢部が偶然に見かける。

車夫 金玉均のお抱えの車夫。

b. 朝鮮人

金玉均 (1851-1894) 朝鮮の政治家。開化派の指導者。クーデター（甲申事変）に失敗して日本に亡命している。矢部を食客とし、軍事探偵として使う。

洪鐘宇 (1850-1913) 同志のふりをして金玉均に近づく。上海で金玉均を暗殺する。

金叔 東学党の一員。

尹其容 東学党の一員。

朝鮮の婦人 清国兵とともに密書を運ぶ。矢部に密書を奪われ、殺される。

朝鮮の民衆 噂話をする。

商人 煙草屋になりすました矢部が立ち寄る店の客。

老爺 煙草屋になりすました矢部が立ち寄る店の主人。

c. 清国人

陳休 清国兵。煙草屋になりすました矢部に金を無心する。

清国兵 清国の兵士。本調査では便宜上陳休以外の清国兵を一括する。

張翼 李朴の部下。陳休の上司。

李之平 金玉均の暗殺を企てるが、逆に矢部に殺される。

第4項 あらすじ

矢部道任は継母の兄である漢籍の師に愛国心を笑われ、家族と喧嘩して家出する。矢部は朝鮮から日本に亡命している政治家金玉均に、身を寄せさせてほしいと頼む。金玉均は矢部を島田糸子の許に行かせる。矢部は島田に、女装して敵情を探りたいと言う。実は、金玉均が島田の許に矢部を行かせたのも矢部に女装の術を身につけさせるためであった。金玉均は秋子爵の別荘に女装の術を身につけた矢部を連れて行く。秋子爵の妾が矢部を金玉均の妾だと思って疑わないほどに、矢部の女装は完璧である。

矢部は、清国人になりすまして武官をしている李朴という日本人のところへ生き、清国の機密情報を聞く。そのとき、ちょうど金玉均を暗殺すべく李之平が日本にいる李逸植の許へ派遣される情報を得る。矢部は李之平を尾行し、知りあう。矢部は大阪で李之平の鞆から機密情報を盗み、缶詰に毒を入れる。矢部は日本軍の奈良大尉に李之平の鞆から盗ん

だ機密情報を提供する。矢部が金玉均と秋子爵に李朴から聞いた機密情報を話していたところ、李之平死亡、李逸植重態の報せが入る。

数年後の明治 26 年、貸し別荘で矢部と金玉均は再会する。このとき矢部は朝鮮語を身につけている。矢部は洪鐘宇が金玉均を殺すつもりだと言うが、金玉均は信じない。そこに訪れた洪鐘宇は一見立派な男であるが、矢部は洪鐘宇が敵であると見抜く。矢部は洪鐘宇を毒殺しようとするが失敗する。

朝鮮で東学党による内戦の準備が進む。矢部は朝鮮へ、洪鐘宇は上海へ、金玉均の命令で調査に行く。矢部は朝鮮で小田吉数という商人の妻の振りをして東学党の尹其容のところへ行く。奈良大尉も日本軍を辞め、東学党の一員になっている。尹其容が警察に送り込んでいる金叔という男から、矢部は、矢部の正体が洪鐘宇を通じて清国に漏れていると聞かされる。

東学党が蜂起する。金叔は矢部に、金玉均が上海に行くつもりであること、上海では金玉均暗殺の準備が整っていることを伝える。矢部は秋子爵に電報を打ち、金玉均を日本に留まらせるように頼む。しかし電報は間に合わず、金玉均は上海で洪鐘宇に殺される。矢部の身にも危険が迫り、女装を解いて朝鮮人になりすます。

矢部は煙草商人になりすまし、朝鮮に駐屯している清国兵に取り入る。矢部は清国兵陳休から、遊女を身請けする金を貸して欲しいと頼まれる。矢部は良い儲け話があると言って騙し、手紙を李朴の許に持って行かせ、黒い豚が話したという嘘を陳休の上司張翼に伝えさせる。矢部は駐屯地に行き、久しぶりに李朴と再会する。李朴は、立場上日本の軍事探偵を処刑せねばならないことを涙ながらに語る。李朴は矢部に、天皇の御影を持って

いると取り調べられたときに危ないからと言い、矢部の持っている天皇の御影を受け取る。

翌日、矢部が煙草商人として駐屯地に行くと、日本の軍事探偵の容疑で小田が捕まっていた。矢部は張翼に、黒豚の妖怪で小田に家族を殺されたと言う。小田が軍事探偵ではないと思った張翼は小田を解放する。

矢部と小田が川沿いの道を歩いていると、朝鮮人の怪しい男女に道を訊かれる。小田は機密情報を持って日本軍のところに行き、矢部は男女を尾行する。女は本物の朝鮮人だが、男は清国兵であった。矢部は男女を銃で殺して日本の艦隊を襲撃する計画の密書を奪い、女の遺髪と銀貨を李朴のところを持って行き、この女の夫に届けるように頼む。

矢部がその密書を日本兵に届けに行く途中、虎と清国兵が格闘している場面に出くわす。矢部は虎を射殺しようとして間違っって清国兵を射殺する。矢部は一度捕まるが何とか逃げ出し、密書を本隊に届ける。これにより日本の艦隊は海戦で清国の艦隊の先を越した。それから矢部は様々なところで活躍したが、最終的には毒死した。

第2節 分析

第1項 概観

本調査では『女装の探偵』で使われている一人称を抜き出し、その傾向を探った。対象は単数の代名詞と、それに接辞がついたもの（「私共」など）に限り、連体詞「我が」などは扱わなかった。「私共」「私宅」のように接辞のあるものは接辞がないものと同じ扱いとした。漢字表記に揺れが大きいので振り仮名によった。

場面や発言の意図などを考慮せず単純に人物ごとの語形を集計すると表1のとおりである。また、男性（主人公の矢部を除く）登場人物が使用する一人称と、女性の登場人物が

使用する一人称をそれぞれ合計したのが表2である。

ただし、この表には金玉均が朝鮮王高宗の発言から引用した「朕」、秋子爵の妾が伊藤博文の発言から引用した「乃公」、矢部道任が金玉均の発言から引用した「乃公」も含んでいる。

表1

	わたくし	わたし	あたくし	あたし	ぼく	おれ	わし	せつしや	おら	ちん	ほんしよく	計
矢部道任	81	7	0	2	6	24	0	0	0	0	0	120
金玉均	0	1	0	0	46	0	0	0	0	1	0	48
李朴	1	0	0	0	24	2	0	0	0	0	0	27
洪鐘宇	0	0	0	0	8	3	0	12	0	0	0	23
奈良大尉	0	0	0	0	16	0	0	0	0	0	0	16
小田吉数	12	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	13
金叔	9	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	12
尹其容	8	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	9
島田糸子	3	2	0	3	0	0	0	0	0	0	0	8
陳休	0	0	0	0	4	4	0	0	0	0	0	8
秋子爵	0	0	0	0	0	5	1	0	0	0	0	6
清国兵	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	6
張翼	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2	4
良家の妻女	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	3
朝鮮の婦人	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3
朝鮮の民衆	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	3
商人	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3
秋子爵の妾	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
漁師	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
車夫	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
李之平	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
老爺	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
計	116	12	1	9	109	49	4	13	4	1	2	320

表 2

	わたくし	わたし	あたくし	あたし	ぼく	おれ	わし	せつしや	おら	ちん	ほんしよく	計
男性 (矢部除く)	32	1	0	0	103	24	4	13	4	1	2	184
女性	3	4	1	7	0	1	0	0	0	0	0	16
計	35	5	1	7	103	25	4	13	4	1	2	200

第 2 項 男性の一人称

a. 概観

表 2 のとおり、男性は一人称を

ぼく > わたくし > おれ > せつしや > おら = わし > ほんしよく > ちん = わたし

の順で使用し、「あたくし」「あたし」は使用しない。

もっともこの表の男性の数値には秋子爵の妾が伊藤博文の発言から引用した「乃公」、矢部道任が金玉均の発言から引用した「乃公」を含めていないから、それを含めれば「おれ」の用例は 24 から 26 になる。

b. ぼく (僕)

金玉均、李朴、洪鐘宇、奈良大尉、小田吉数、金叔、尹其容、陳休、張翼が使用しており、男性の一般的な一人称代名詞であったと考えられる。

c. わたくし (私・私し・わたくし)

李朴、小田吉数、金叔、尹其容、李之平、老爺が使用しており、「ぼく」ほどではないが男性の一般的な一人称代名詞であったと考えられる。注目されるのは金玉均や奈良大尉ら

が使用していないこと、李朴も「ぼく」が 24 例であるのに対して「わたくし」は 1 例しか使用していないことである。政治家である金玉均や軍人である李朴や奈良大尉はエリートであり、「ぼく」という一人称がより適切だったのであろう。

d. おれ（俺・乃公・己）

李朴、洪鐘宇、陳休、秋子爵、清国兵、張翼、朝鮮の民衆が使用している。民衆の世間話に使用されていること、また、この作中ではあまり統率が取れていない設定になっている清国兵が使用していることから、「ぼく」「わたくし」などに比べると粗野な一人称であるようである。

作中での陳休についての記述から、「おれ」に比べると「ぼく」のほうが改まった表現であることがわかる。陳休は 8 例の一人称の内、「おれ」「ぼく」がそれぞれ 4 例である。「おれ」を使っているのは後篇の「其十七」「其十八」でそれぞれ二回ずつであり、「ぼく」を使っているのは「其十九」「其二十」でそれぞれ二回ずつである。陳休は「其十九で」矢部に儲け話を持ちかけられると急に態度が叮嚀になる。それを美妙は次のように描写している。

「^{ぼく}僕にできる事ですかい」と早言葉^{はやことば}までが^{あらた}改まる。

(後篇「其十九」)

e. せつしや（拙者）

一人称として「拙者」を使用しているのは朝鮮人である洪鐘宇と金叔のみであるから、割と特殊な一人称であると考えられる。本来二人とも朝鮮語で話しているという設定であ

るから、これらの例をもって当時日本で「拙者」という一人称代名詞が一般的に使われていた証拠にはならない。金叔も12回の一人称のうち1回しか使用していないから、基本的には洪鐘宇しか使わないのであり、洪鐘宇のキャラクタづけのために使われているのかもしれない。

f. おら（己・おら）

車夫と漁師が使用している。粗野で垢抜けない一人称であるようだ。車夫については「下司の高調子」（前篇其四）、漁師については「高咄し」（前篇其五）と評されている。

g. わし（私）

秋子爵と商人が使用している。この二人は似ていないが、秋子爵は陸軍少将、商人は五十恰好であり、どちらも割と年長である。ただし、秋子爵も1例であるし、商人も朝鮮語で話している設定であるうえ、義州^{*11} 訛りと書かれているから、特殊な一人称であろう。

h. ほんしよく（本職）

「本職」は張翼が2回使用している。軍人としての一人称である。

i. ちん（朕）

「朕」は金玉均が1回使用しているが、もちろん金玉均自身を指すのではなく、朝鮮王高宗の発言から引用したものである。

j. わたし（私）

「わたし」は金玉均が1回使用している。これは金玉均と矢部が初めて話し合うシーン（前篇其六）での第一声ある。そのため普段の「僕」より丁寧な表現を使用しているであろう。

第3項 女性の一人称

a. 概観

表2を見ると、女性は一人称を

あたし>わたし>わたくし>あたくし=おれ

の順で使用するとなりそうだが、実際には「おれ」は秋子爵の妾が伊藤博文の発言から引用した「乃公」であるから、

あたし>わたし>わたくし>あたくし

の順であり、「ぼく」「わし」「せつしや」「おら」「ちん」「ほんしよく」は使用しないと
言っている。

b. あたし

使用している人物は日本人である島田糸子、良家の妻女、そして朝鮮人の婦人である。

それぞれ全く別のキャラクタであり、女性の一般的な一人称代名詞であったと考えられる。

c. わたし

島田糸子、良家の妻女、秋子爵の妾が使っている。いずれも日本人である。「あたし」と
同程度に女性の一般的な一人称代名詞であったと考えられる。

d. わたくし

3例とも島田糸子である。「あたし」「わたし」に比べると多少特殊な一人称であるかも
しれない。

「あたし」と「わたし」と「わたくし」の違いを島田を通して見てみよう。島田の一人
称は全部で8例であり、話の相手は全て矢部である。「わたくし」を使っているのは前篇の

「其九」に1例、「其十」に2例である。「わたし」を使っているのは前篇の「其十一」に2例であり、「あたし」を使っているのは前篇の「其十一」に3例である。「わたし」の2例の後に「あたし」の3例がある。つまり、島田の一人称は「わたくし」→「わたし」→「あたし」と変化している。これは段々と矢部と打ち解けているためであり、この順に叮嚀なのだと考えられる。

e. あたくし

良家の妻女が1例使っているのみである。「わたくし」以上に特殊な一人称であるかもしれない。

第4項 男女の一人称の比較

以上の分析から、一人称は男性専用、女性専用、両用 の三種に分類できる。

男性専用 ぼく・おれ・せつしや・おら・わし・ほんしよく・ちん

女性専用 あたし・あたくし

両用 わたくし・わたし

もっとも、この中でも「わたし」は金玉均が一例使うのみであるから、ほぼ女性専用に近いと言うことができよう。

女性の一人称に種類が少ないのは、日本語には女性に比べ男性のほうが一人称に種類が多いことであろうが、単にこの小説に女性の登場人物が少ないことも影響しているように思われる。

第5項 矢部道任の一人称

a. 概観

さて、以上を踏まえて主人公である女装の探偵矢部道任の一人称を分析してみよう。

表2のとおり、矢部は一人称を

わたくし>おれ>わたし>ぼく>あたし

の順で使用し、「あたくし」「わし」「せつしや」「おら」「ちん」「ほんしよく」は使用しない。矢部が使用していない一人称はいずれも特殊なものであるから、使用しないのは自然である。

本作品で矢部は、前篇の「其一」から前篇の「其十二」まで男の姿であり、前篇の「其十三」から後篇の「其十四」まで女装であり、後篇の「其十五」から後篇の最後「其三十八」まで男の姿で朝鮮人の煙草屋になりすます。つまりこの物語は矢部の姿を基準とすると、男装期、女装期、煙草屋期の三期に大きく分けることができる。その期間ごとに集計したのが表3である。その期間ごとのすべての一人称代名詞に対するその一人称代名詞のパーセンテージ（小数点以下一桁まで。以下四捨五入）を示したのが表4である。

表3

	わたくし	おれ	わたし	ぼく	あたし	計
男装期	13	2	0	0	0	15
女装期	37	16	7	6	2	68
煙草屋期	31	6	0	0	0	37
計	81	24	7	6	2	120

表 4

	わたくし	おれ	わたし	ぼく	あたし
男装期	86.70%	13.30%	0.00%	0.00%	0.00%
女装期	54.40%	23.50%	10.30%	8.80%	2.90%
煙草屋期	83.80%	16.20%	0.00%	0.00%	0.00%
計	67.50%	20.00%	5.80%	5.00%	1.70%

b. わたくし

男装期、女装期、煙草屋期を通じて多数使われている。矢部の普段の一人称であるらしい。女装期で若干使用率が低いのは「わたくし」が本作品において若干男性的な一人称となっていることであろうが、それよりは、女装期には様々な冒険をするために場面に応じて様々な一人称を使いわけなければならず、他の一人称が使用されることが大きな要因であると思われる。

「わたくし」という一人称代名詞は男性専用ではない。先述のとおり島田糸子も使用している。また、女装期の37例において矢部が「わたくし」を使用している会話文の相手は表5のとおりである。

表 5

金玉均	金玉均 秋子爵と	金叔	奈良大尉	小田吉数	尹其容	李朴	洪鐘宇	李之平
7	1	7	7	5	4	3	2	1

注意すべきは李之平である。李之平は金玉均の暗殺を企む清国人であるから矢部の敵であり、矢部が男であることを知らない。したがって、どうしても矢部は李之平に自分の正体を知られてはならない。その李之平相手に、一例ではあるが、「わたくし」を使っている。また、尹其容は矢部の仲間であるが、最初は尹其容は矢部を女だと思っていたし、矢部も

尹其容が敵ではないかと疑っていた。それでも「わたくし」を使うのである。もっとも二人とも日本人ではなく、矢部が李之平相手にはシナ語、尹其容相手には朝鮮語で話しているという設定になっていることも一因であるかもしれない。

c. おれ

男姿期の2回、女姿期の16回の用例はいずれも独語である。煙草屋期6回の用例のうち5例は独語であり、残り1例の相手は朝鮮の婦人である。

独語や、これから殺す相手である朝鮮の婦人のように立場が下の者に対して使っていることから、男性的で乱暴な一人称であることがわかる。

d. わたし

7例とも女装期の使用である。5例の相手は奈良大尉であり、2例の相手は良家の妻女である。良家の妻女は矢部を女だと思っている。しかし、奈良は矢部が男だと知っているから自分を女性として見せる必要はないはずであり、「わたし」を使う理由は明白ではない。しかし、「わたし」が若干女性性が高い両用形式であることは確かであろう。

矢部は李朴に会いに行く途中、良家の妻女と知り合いになる。その会話は次のとおりであり、女性的な文末形式を用いている（後述）。

夜行のさびしさ、その人の娘と見える女の児も既に眠ッてしまッて、妻女ひとり退屈して居た折とて好い咄し相手が出来たと悦ぶ様子で、妻女の方から言葉をかけた。

「御一人でございますか、嘸御さみしう御座いましやうねエ。」

「はい、急用の出来ましたもので。」

「御遠方ごえんぼうでございますか」。

「はい」と言いつたのみで迂闊うかとは言いはず、まづ相手あいてから調べしらべに掛かかる。「やはり御遠方ごえんぼうで」。

「私あたしどもでございますか。京都きやうとまで」。

「おや左様さやうで。私わたしは神戸かうべまで。女をんなの夜行瀛車やかうきしやの一人旅ひとりたびは本当ほんとうに否いやでございますわねエ。

しますると京都きやうとまでは御一ご所に参まゐられて御蔭おかげさまで私わたしも心細こころぼそうございませぬ、おほ
ツ」。

「いえ、私わたしも御同ごどうやう様に」。

「あの明日何時頃めうにちいつごろかふべ神戸ちやくには着きいたすので御座ございますかねエ」と故ことさらに空そらとぼけて。

「ほゝゝ、私あたしもつひ存ぞんじませぬで——何時なんじとか申まをしましたが。その癖くせこの街道かいだうを只今始ただいまはじ
めて旅行りよかういたすのでございませぬけれども、婦人ふじんと申まをすものは意氣地いけじの御座ございませぬ
もので、いつも同伴どうはんにもたれて居をりますもので、ほゝゝ」

「さようでございますねエ」と嫣然微笑えんげんびせうした風情ふうせいは女をんなも惚々ほれへとなるほどである。

(前篇「其十五」)

e. ぼく

6例とも女装期である。しかし4例の相手は洪鐘宇であり、1例の相手は金玉均と洪鐘宇の二人であり、1例の相手は金叔である。3人とも矢部が男であることを知っている。

以下のようにあることから、両用形式である「わたくし」ほどには叮嚀でないことがわかる。「ぼく」は「おれ」ほどではないにせよ、矢部が「本性」を出したとき、乱暴なことを話すときに使用する。

「飲む、今夜は僕」。矢部その振金の本性が出た。

「うまい、斯ういふ時に飲むのが。人を馬鹿、翌日をも知れぬ命だ。戦争の有るまで繋ぎたいが、正義のため、博愛のためもし已むを得ぬとすれば今でも捨て、悪魔の奴等を。生きて居る内が花、飲むべしだ、大に飲むべしだ」と言つて忽ち気を換へて、「洪君、鐘宇先生、妙な事を聞くが、君は血は好きか」。

(前篇「其三十八」)

さらに、洪鐘宇に対する4例の内2例は、矢部が洪鐘宇を暗殺しようとするシーンである。矢部は片面に亜ヒ酸を塗ったナイフでリンゴを割り、亜ヒ酸を塗っていない面が当たったリンゴを自分が食べて安心させ、亜ヒ酸を塗った面が当たったリンゴを洪鐘宇に食べさせるという手口で洪鐘宇を殺そうとする。友情を装って殺そうとするのであるから、「ぼく」は友情や親しさをも表すと言っていいだろう。また、矢部は次のように言って洪鐘宇に毒リンゴを食べさせようとする。

矢部は早食ふ。「あツ旨い。旨いです、君」。

(前篇「其四十」)

ここで矢部は「ぼく」と対になる「きみ」という二人称代名詞を使って洪鐘宇に対する友情を装っている。

f. あたし

2例とも女装期である。その相手は李之平らの宿の番頭である。矢部は自分が金玉均に捨てられた女であり金玉均を恨んでいると偽り、李之平の宿についてゆく。李之平の鞆か

ら機密情報を盗んで缶詰に毒を入れ、その機密情報を奈良大尉に提供するために出かける場面である。その会話は次のとおりであり、ここでも女性的な文末形式を用いている（後述）。

「へゝツ御退屈さまで」と顔差し出したのは宿帳を付けに来た男で、「へゝ、御面倒さまでも御名前を……御つれ様のは最う伺ひまして御座います」。「あ、さうですか、それぢや口で言ひますから貴郎其所で書いて下さいな。東京神田三河町十六番地間部荊子」。

旅行の目的などは素より口から出まかせで、やがて男が書き了つた時分には自分も小包みを絆げをはつて、

「あの番頭さん、ちよいと妾また用が有つて出掛けますが、ぢき歸つてまいりますよ。だが、此所にある妾の鞆は先刻御預け申したのと一所に此家の御帳場であづかつて置いて下さいな。え、なに、人力車は要りません、近いところへ行くので、そして又路は知つてますから」。

（前篇「其二十四」）

「妾」の字が当てられている。これは女性の一人称に用いられる漢字であるから、そもそも男性の一人称代名詞として使用されようはずもない。

「あたし」は明白な女性専用形式であり、矢部にこの一人称代名詞を使わせる背景には、矢部が女性になりすまそうとしていることを示していよう。

第6項 まとめ

以上をまとめると、女装の軍事探偵というキャラクターである矢部は、女性になりすま

さなければならぬ場面では女性専用の一人称代名詞「あたし」、女性性の高い一人称代名詞「わたし」、男女両用の一人称代名詞「わたくし」を使用する。その一方、男性専用の一人称代名詞「おれ」「ぼく」は、矢部が男であることを知っている相手にしか使用しない。また、「わたくし」を使用する以上、女性になりすまそうとしていても、必ずしも女性専用の一人称代名詞を使わねばならないというわけではない。

また、必ずしも女性専用の一人称代名詞を使用するわけではないのと同様、文末表現も必ずしも女性専用の形式を使っているわけではない。明白に女性専用の文末形式を使っているのは既に掲げた

「おや^{さやう}様^で。私^{わたし}は^{かうべ}神戸^{まで}。女^{をんな}の^{やかう}夜行^{きしや}瀛^{ひとり}車^{たび}の^{ほんとう}一人^い旅^やは^{ほんとう}本当^にに^い否^でござ^{います}す^わね^え工[。]。

しますと^{きやうと}京^ご都^{いつしよ}までは^{まゐ}御^お一^か所^げに^{わたし}参^こら^るれ^そて^ご御^ざ蔭^いさ^ままで^{わたし}私^もも^こ心^こ細^ろう^ござ^いま^せん、^おほ^つツ[。]。

(前篇「其十五」)

が挙げられる。他には、矢部と金玉均が泊まった貸し別荘での女中との会話での

^いひ^つつ^けた^ぐけ^の酒^{しゆ}肴^{かう}を^{はこ}運^あば^せた^あ後^よ、^あ用^よが^あ有^らば^よ呼^ぶか^らと^て女^{ぢやう}中^とを^{とほ}遠^ざけ^なが^ら、^{さら}更^にに[。]
^やべ^ぎ玉^よ均^{きん}の^{めい}命^うを^う受^けて、

「しかし^{ねえ}姐^たさん、^た但^ごもし^{しやう}洪^と鐘^な宇^のと^な名^{てう}唱^{せん}る^{じん}朝^{だん}鮮^な人^{たづ}が^お旦^で那^でを^さ尋^ねて^お御^で出^でで^したら^{ちよ}一^つ寸^つい^つつ[。]
でも^お御^と取^つり^ね次^がぎ^を願^ひま^すす^よ」。

「かしこまりました。朝鮮^{てう}の方^{せん}で^{かた}ござ^いま^すね[。]」。

「いえね、どの朝鮮の方でもと言ふのぢやありませんの。他の朝鮮の方が来かるも知れませんが、旦那が御目に掛かると仰やるのは差しあたりその洪鐘宇といふ人だけなのですから」。

名を覚えかねるといふ顔つきで、女中はもじ〜。

「おほッ、洪鐘宇といふのよ。斯う書くの」と端箋に記して与へて、「そのとほりの名刺を出しましたなら」。

(前篇「其二十七」)

がある。これらは全て相手が女性であることにも意味があるかもしれない。女性同士のような打ち解けた間柄でないかぎり女性専用の文末形式が出なかったのではないだろうか。現代でも、目上の人と話すときは同輩以下と話すときに比べて男女の言葉遣いの差はあまり大きくないだろう。

もつとも、「心細うございませぬ」のような丁寧な表現も女性性が高いといえるかもしれない。女性になりすまそうとする矢部がどのような文末形式を使用し、どのような文末形式を使用していないかについては未調査である。

第3章 昭和前期——『エロ・グロ男娼日記』 を通して

第1節 作品について

第1項 本作品を取り上げる理由

本章では流山竜之介の小説『エロ・グロ男娼日記』を資料として、昭和前期の男性の女

性語使用を分析する。

『エロ・グロ男娼日記』は主人公の男娼愛子の日記の形式を取った日記体小説である。

本作品の主人公愛子は女装して男娼となり、生計を立てている。そのため主人公には女性になりすます必要があり、そのために女性的な言語の運用が行われるであろうと考えられることが本作品を取り上げる理由である。明治期が男性語と女性語の黎明期であり、現代が斜陽期であるとすれば昭和は隆盛期であるはずである。もっとも、著者は生年も出身も未詳であるため多少は地域方言・社会方言の影響を考えねばならない。が、舞台は東京であり、主人公は東京方言を用いているから、地域方言の影響はあまり気にせずともよいだろう。

この当時の社会状況についていくつか附言しておこう。三橋（2008）は次のように、この当時愛子のような女装の男娼が少なくなかったことを述べている。

当時の新聞を調べていくと、一九二七年（昭和二）ごろから、女装男娼の摘発（逮捕）事例が新聞の社会面に現れるようになります。その数は、一九三七年（昭和十二）ごろまでの一〇年間に一〇例ほどを数えることができ、当時の東京の盛り場である浅草や銀座では、少数ですが定常的に、女装男娼が女性の街娼に混じって活動していたことがわかります。

（166 ページ）

また三橋は「私は『エロ・グロ男娼日記』の女装男娼「愛子」は、小説的な理想化がなされているとはいえ、実在のモデルがあったと考えています」（168 ページ）と述べている。

その描写のリアルさからも、本作品はある程度緻密な取材に基づいて書かれたものであることがわかる。

1937（昭和 12）年 3 月 28 日の『読売新聞』には「"闇の男"現る 又も銀座で刑事に秋波」と題された記事があり、山本太四郎（福島ゆみ子）という男娼が銀座で摘発されたと報じている。この記事には女装して女にしか見えない山本の写真が掲載されているが、そのキャプションは「男ナンテ**甘い**わ……といふ闇のをとこ」となっており、当時女装の男娼によってこのような女性的な文末形式が使われていたことがわかる。

第 2 項 作者・成立・諸本

『エロ・グロ男娼日記』は流山竜之介（生没年未詳）の小説である。

三興社から昭和 6（1931）年に出版されようとしたが、発行禁止となった。現在ではおそらく国立国会図書館に一冊が所蔵されているのみである。本調査では国立国会図書館のマイクロフィッシュを利用した。

第 3 項 主要な登場人物

愛子 22 歳。女装の男娼。出身は群馬県。

中学生 不良中学生。デブ、チビ、ノッポの三人。

佐々木 客。自由労働者。

島内敏太郎 懇意の客。

布川義雄 客。学者。ブルジョワ紳士。

上沼福雄 客。会社員。25 歳。

後藤清吉 客。請負師。52 歳か 53 歳。

大佐 退役軍人。50 歳ほど。

刑事 愛子を逮捕する。

氏家 姦通の片割れ 万引き常習者の姉妹 以上 4 人は愛子と同じ官房に入れられた女たち。

第 4 項 あらすじ

愛子はある会社員上沼を相手に売笑をする。翌日、愛子は三人の中学生を相手に売笑をするが彼らは愛子の正体に気づかない。

その翌日、刑務所帰りの佐々木の相手をするが、代金を踏み倒される。そこへ客の島内からブルジョワ紳士布川を紹介する手紙が届く。

上沼が再び訪れる。愛子は上沼に恋心を抱く。その後、後藤が訪れる。愛子は後藤が気に入らない。後藤は愛子を妾として囲いたいと言うが、愛子は断る。

布川が訪れる。愛子は布川に連れられ、車で東京から京都まで行く。

愛子は新聞記者に取材される。幼少の頃から女性的性向があったこと、上京した先で先輩である福島に無理に夫婦のような関係にされたが、福島が逮捕され、生活のために男娼となったことなどを語る。

翌日、新聞記事のために愛子の正体を知った大佐に話しかけられ、おごられて飲食する。

ある日愛子は刑事を誘惑しようとして逮捕され、女檻房へ入れられる。脛毛で刑事に正体を知られ、保護房に入れられる。十日後、出所する。

上沼への恋が募った愛子は泣き喚く。

上沼は愛子にもう会えないという手紙を送る。愛子は後藤に説得され、妾として囲われ

ることとする。

愛子は今までの客に別れの手紙を書く。愛子は偶然上沼とその妻冷子に会う。愛子は腹癒せに二人の前で立小便をしてみせる。

第2節 分析

第1項 概観

本調査では『エロ・グロ男娼日記』で使われている一人称を抜き出し、その傾向を探った。対象は単数の代名詞と、それに接辞がついたもの（「僕等」など）に限り、連体詞「我が」などは扱わなかった。「僕等」のように接辞のあるものは接辞がないものと同じ扱いとした。漢字表記に揺れがあり、また、第2章と統一するため振り仮名によった。ただし、振り仮名のない部分は振り仮名のある部分から類推した。

場面や発言の意図などを考慮せず単純に人物ごとの語形を集計すると表6のとおりである。また、男性（主人公の愛子を除く）登場人物が使用する一人称と、女性の登場人物が使用する一人称をそれぞれ合計したのが表7である。

ただし、この表には布川義雄が愛子の発言から引用した「あたし」や、愛子が島内敏太郎の心中を推し量って使った「俺れ」も含んでいる。

表 6

	わたし	あたし	あたくし	ぼく	おれ	わし	計
愛子	38	47	10	156	1	0	252
後藤清吉	0	0	0	0	14	0	14
島内敏太郎	0	0	0	0	5	0	5
上沼福雄	0	0	0	4	0	0	4
刑事	0	0	0	1	3	0	4
氏家	0	3	0	0	0	0	3
布川義雄	0	1	0	2	0	0	3
姦通の片割れ	0	2	0	0	0	0	2
新聞記者	0	0	0	2	0	0	2
中学生	0	0	0	1	2	1	4
万引嬢(姉)	0	1	0	0	0	0	1
万引嬢(妹)	0	1	0	0	0	0	1
佐々木	0	0	0	0	1	0	1
大佐	0	0	0	1	0	0	1
計	38	55	10	167	26	1	297

表 7

	わたし	あたし	あたくし	ぼく	おれ	わし	計
男性 (愛子除く)	0	1	0	11	25	1	38
女性	0	7	0	0	0	0	7
計	0	8	0	11	25	1	45

第 2 項 男性の一人称

a. 概観

表 7 を見ると、男性は一人称を

おれ>ぼく>わし=あたし

の順で使用するとなりそうだが、実際には「あたし」は布川義雄が愛子の発言から引用

したものであるから、

おれ>ぼく>わし

の順であり、「わたし」「あたし」「あたくし」は使用しないと言っていい。

もっともこの表の数値には愛子が島内敏太郎の心中を押し量って使った「俺れ」を含めていないから、それを含めれば「おれ」の用例は25から26になる。

b. おれ

後藤清吉、島内敏太郎、刑事、中学生、佐々木が使用している。また、愛子が島内敏太郎の心中を押し量って使っている。男性の一般的な一人称のようである。「ぼく」に比べると乱暴なようである。

c. ぼく

上沼福雄、刑事、布川義雄、新聞記者、中学生、大佐が使用している。愛子に気に入られる上沼や、学者の布川が使っていることを見ると、「おれ」に比べると垢抜けた、優しげな人や身分の低くない人の一人称のようである。

d. わし

一例あるのみである。中学生が「わしやツライ!」(7 ページ) というシーンである。永井荷風の『断腸亭日乗』の1934(昭和9)年2月13日の条には「当世青年男女の用語」と題して19の「用語」を羅列している(永井、1951)。この中に「わしやアつらいヨ」という「わしやツライ」によく似た言葉が掲載されていることから、これは当時の流行語であるらしいことが分かる。「わし」は流行語「わしやアつらいヨ」「わしやツライ」の一部であり、当時一般的に広く使われていた一人称とは考えにくい。

第3項 女性の一人称

表2のとおり、女性は一人称を

あたし

のみ使用する。残りの「わたし」「あたくし」「ぼく」「おれ」「わし」は使用しない。ただし、女性の発言がわずか7例しかないことに留意する必要がある。また、いずれも監房で拘留されていることも考慮した方がいいかもしれない。

第4項 男女の一人称の比較

以上の分析から、一人称代名詞は 男性専用、女性専用の二種に分類できる。本作品には両用の一人称代名詞は見られない。しかしこれは本作品の一人称代名詞の使用が圧倒的に愛子に偏っていること、女性のキャラクターが少ないことに注意しなければならない。

男性専用 おれ・ぼく・わし

女性専用 あたし

第5項 愛子の一人称

a. 概観

さて、以上を踏まえて主人公である男娼愛子の一人称を分析してみよう。

表7を見ると、愛子は一人称を

ぼく>あたし>わたし>あたくし>おれ

の順で使用するとなりそうだが、実際には「おれ」は島内敏太郎の心中を押し量って使用したものであるから、

ぼく>あたし>わたし>あたくし

の順であり、「おれ」「わし」は使用しないと言っていい。

本作品は愛子の日記の形式を取っているから、愛子の一人称は、地の文と会話文に登場する。更には愛子の口述を筆記した形式になっている新聞記事や、後藤の妾として囲われることにしたときに今までの客に書いた別れの手紙もある。愛子の一人称代名詞をその 4 つの場合に分けて集計すると表 8 のとおりである。太枠で囲んだのはそれぞれの場合で一番多く使われている一人称代名詞である。

表 8

	わたし	あたし	ぼく	あたくし	おれ	計
地の文	1	5	154	0	0	160
会話文	0	40	1	5	1	47
新聞記事	36	1	1	0	0	38
手紙	1	1	0	5	0	7
計	156	47	10	38	1	252

これを見ると、いくつかの例外はあるが

地の文 ぼく

会話文 あたし

新聞記事 わたし

手紙 あたくし

という明確な使い分けを見て取ることができる。

以下、島内敏太郎の心中を推し量って使用した「おれ」は無視し、それぞれの場面ごとに一人称代名詞を観察する。

b. 地の文

表 8 のとおり、愛子は地の文で一人称を

ぼく>あたし>わたし

の順で使用し、「あたくし」は使用しない。

b-1. ぼく

地の文は圧倒的多数が「ぼく」である。「ぼく」は男性専用の形式であるが、自分の日記であるから、自分が男であることを隠す必要がないのである。

たとえば、次のような具合である。

(前略) ——ゆうべの客は随分面白い男だった。何しろ、**僕**が例の草町の第二大 盛すゑぶんおもしろ館たいせん【ママ】へ連込むまで、あの男は**僕**を女だと思つてゐたらしいんだから笑はせる。(後略)

(1-2 ページ)

b-2. あたし

「あたし」は5例であるが、これらの例は特に自分の女性性を示す必要があるときに使用される、一種の修辞法とも言うべきものであるらしい。

(前略) それから乱れた髪にザツと櫛目を入れ、アイロンで巻き毛とウエーヴでポイントを打つと、見ちがへるほど美しくなつた**僕、いやさ、あたし**が、燃えるやうな友禅メリンスの長襦袢ながじゆばんに紫博多の伊達巻だてまきを少しばかりユルミを見せて、片膝たてゝヂツと鏡かたひざの中で笑つた様子は、どこから見たつて、ゆうべのあの男でなくたつて、だれでも惚れほてくれるにちがいない。(後略)

(4 ページ)

この場面では愛子が化粧し、お洒落をしていかにも女らしくなるシーンであり、それを表現するために「僕」を「あたし」と言いなおしている。

次の例は後藤から指輪を贈られた場面である。これもまた愛子の女性性を表していよう。

で、**僕の、いや、あたし**の指には、後藤の思ひざしのアレキサンドリアがピカピカと輝くことになったのである。

(30 ページ)

次の3例は愛子が上沼に恋いこがれる気持ちを記した部分である。

恋こひ ひしい人よ!

なつかしい人よ!

あたしは……………

あたしは……………

(77-78 ページ)

あの人は**僕**が好きだと云った。だが、愛してゐてくれるだらうか?

だが、だが、たとへ、あの人が**僕**を少しも愛してゐないとしても、**僕**はあの人を愛さなければならないのだ。それが**あたし**の正しい道で、またそれより外に途はないのだから…………。

(78 ページ)

この3例はこのとおり「僕」と「あたし」が交じっており、「あたし」を使う表現意図は

それほど明確ではない。しかし、「あたし」を使っている部分では上沼への恋という、自分のより女らしい部分（もつとも、男に恋をすることは現代では必ずしも女性的とは考えられていまいが）を、より女性的に述べているように感じられる。

b-3. わたし

地の文で「わたし」を使っているのは次の一例である。

今日まづ〇〇新聞しんぶんを買ってみた。それは、昨日の新聞記者しんぶんきしやに話したことや、私の写真しやしんが出てあるのが見たかつたからだつた。

(53 ページ)

ここでの表現意図は不明だが、あるいはこの直前が「わたし」を多用する新聞記事であるために引きずられたものであろうか。

c. 会話文

愛子は会話文で一人称を

あたし>あたくし>ぼく

の順で使用し、「わたし」は使用しない。

c-1. あたし

会話文は圧倒的多数が「あたし」である。地の文では男性専用の形式である「ぼく」が主であるのに対し、こちらは女性専用の形式であり、自分を女性的に見せようとしていることがわかる。愛子の正体を知らない者に対してのみならず、愛子の正体を知っている者に対しても用いていることから、女性になりすますということ以上に、職業柄、異性愛者

の男性から見て性的魅力があるように見せるための女性語であろう。

たとえば、次のような具合である。

(前略)「ねえ、でも、**あたし**、オトコ、オンナなのよ。いゝでしょう? だつて、ホラ、**あたし**、かうして髪を断髪にして、白粉をつけて、口紅をつけて、眉墨ひいて……。どこか、あなたの好きな『彼女』に似てゐないこと?」(後略)

(2 ページ)

c-2. あたくし

会話文には「あたくし」の用例が5例ある。その内2例の相手は布川義雄である。

「はあ、ありがとう存じます。**あたくし**、今日はどこへでもお伴させて戴きますわ その代り、一寸、**あたくし**がお化粧をするまで待つていたゞきたいんですけれど」

(32 ページ)

この直前に

かうなると、相手がブルジョワの紳士だから、自由労働者の佐々木を野天で相手にしたのや、後藤をカラかつてゐる時のやうにノンキにはゐられない。こつちも忘れかけた『遊ばせ』言葉で立合はねばならない。

(31 ページ)

とあることから、愛子は叮嚀な一人称代名詞として「あたくし」を選んでいると思われ

る。布川から

「なんだつて、そんな言葉を使ふんだなあ、もつとザツクバランにやつてくれんと一向
面白くないよ」

(34-35 ページ)

と言われた後は、

「でも、島内さんがお手紙で、あなたはズキ分気むづかしい方だから、気をつけて口を
聞かないと大変だつて云われたもんですから」

「ウハツト! それや嘘ぢやよ、お前をわざとおどかしたのだ」

「あら、そうなの?」

「それ、その調子! そいつでやつて貰はんと困るよ、いゝかい」

「えゝ、いゝわ」

「ぢや、愛子」

「ぢや、あたしの布川さん」

「やだなア、『あたしの』だけは餘計だよ。島内にきかれると角を出されるぞ」

「オホゝゝゝ」

「アツハツハ」

(35 ページ)

という調子である。

後の3例の相手はそれぞれ、大佐が1例、看守の刑事が1例、上沼福雄の妻が1例である。大佐と刑事は愛子より立場が上であるから丁寧な言葉遣いをしようとするのは当然である。また、上沼の妻とは初対面であるために丁寧な言葉遣いをしているものと思われる。現にその場面の愛子の発言も

「あら、奥さん、**あたくし**、浅草の△△劇場^{げきぢやう}のレビュー女優^{じよゆう}で愛子と申します」

(106 ページ)

と、かなり懇懇である。

c-3. ぼく

会話文に「ぼく」の用例は1例あり、相手は布川義雄である。

「ようこそ、おいで下さいました。いつおいでになるかと、**僕**は、お心待ち^{こころまち}にしてゐた
んでございますの。島内^{しまうち}さんのお手紙^{てがみ}は大阪からいただきました」

(32 ページ)

これは布川との初対面の場面である。ここでの表現意図は不明だが、あるいは「ブルジョワ紳士」である布川と対面して、正式な、男としての一人称を選んだものか。

d. 新聞記事

愛子は新聞記事で一人称を

わたし>あたし=ぼく

の順で使用し、「あたくし」は使用しない。

d-1. わたし

新聞記事は圧倒的多数が「わたし」である。その表現意図は不明だが、あるいは私的な
丁寧な表現である「あたくし」に対して、公的な丁寧な表現であるのかもしれない。

たとえば、次のような具合である。

(前略) **私**は長男で、兄弟は女ばかり四人^{けふだい}あて、それがみんな年上^{としうへ}でした。(後略)

(44 ページ)

d-2. あたし

新聞記事で「あたし」を使っているのは新聞記事の冒頭 (44 ページ) の 1 回のみである。
ここでの表現意図は不明だが、あるいはこれまで会話文で「あたし」を使用していたこと
に引きずられたものであろうか。

d-3. ぼく

新聞記事で「ぼく」を使っているのは次の 1 例だけである。福島という男に手箒めにさ
れたという、愛子が女の姿になる切っ掛けとなる事件について語るシーンである。

(前略) **僕**は一時非常に怒^{おこ}りましたが、どうも恥^{はづか}しくて他人には云へません。(後略)

(46 ページ)

ここでの表現意図は不明である。あるいは当時自分が男性であったことを強調している
のかもしれない。

e. 手紙

愛子は手紙で一人称を

あたくし>あたし=わたし

の順で使用し、「ぼく」は使用しない。手紙では主に「あたくし」を使用していることがわかる。ただし、用例が少ないこともあり、「あたし」や「わたし」に何らかの意味があるのかは不明である。

第6項 まとめ

以上をまとめると、女装の男娼というキャラクターである愛子は、女性になりすますために女性専用の一人称代名詞「あたし」「あたくし」を使用する。また、相手に正体が知られていてもこれらの一人称を使用する。一方で、そのような必要のない地の文では男性専用の「ぼく」を使用する。「おれ」を使用しないのは、愛子が女性的性格を持つ人物であるため「ぼく」に比べて乱暴な「おれ」を避けているのであろう。

愛子は第2章で見た矢部と違い、精神的にも女性的なキャラクターであり、矢部がそうであったように単純に女性になりすましているとはいえない。つまり、今でいう性同一性障碍に類するものであり、だとすれば、女性に**なりすます**ためというよりは、女性**である**ために女性語を使用しているのかもしれない。ときに「ぼく」を使用しときに「あたし」を使用する、アイデンティティに揺れのある人物として描かれているとも言えよう。

さて、文末形式も、矢部に比べると明白な女性専用形式を使用している。たとえば次のような調子である。

(前略)「ねえ、でも、あたし、オトコ、オンナ**なのよ**。いゝでしょう? だって、ホラ、あたし、かうして髪を断髪にして、白粉をつけて、口紅をつけて、眉墨ひいて……。どこか、あなたの好きな『彼女』に似て**みないこと?**」(後略)

(2 ページ)

「あら、兄さん! あんた、どつかで見たやうな**方だわねえ**」

(8 ページ)

「でも、あたし、あなたを**知つてゝよ**」

(8 ページ)

これが人物設定の違いからくるものかそれとも時代の違いからくるものかは判然としない。あるいはさまざまな要因があるのかもしれない。

また、愛子は新聞記事の中で次のようにも述べていて、かつては男性語を使っていたが、後に女性語を使うようになったことがわかる。

さて、オンナになつて、美しい着物をきて、化粧をしてみると、自分ながらこれが男の私だらうかと怪しむほど自分で云つてはおかしいですが、美しくなるのです。その上かうして福島と情交をつづけてゆくうちに、私は妻、彼れは夫といふ風な気持を抱くの、何んの不思議がなくなつて来ました。

そこまでゆくと、全くオンナとしての私は自信がついて来たのです。最初は絶対に夜分しか出ないものが、こんどは昼間も段々として、「あら、あらそうだよ」なんて、**女のダワヨ言葉**が云へるやうになつてしまつたのです。(後略) (49-50 ページ)

おわりに

第1節 今後の展望

さて、ここでいくつか今後の男性の女性語使用、そして女性語についての研究の展望について書いておきたい。端的に言えば今回充分調査しつくすことの出来なかった反省点がある。

第1項 恋人募集広告における女性語

第1章第2節第1項では、同性愛者の男性が恋愛上の戦略として女性語を使用することを述べた。D. Cameron ら（2009）は、新聞の恋人募集欄について「ゲイ男性は身体的魅力について多くを語り、レズビアンはほとんど語らない」（216 ページ）としたうえで、次のように述べる。

恋人募集欄は、このようにさまざまな欲望が世間に表明され、流通するありさまを示す好例となる。言語学者は、広告の組み立て方と内容から、それぞれの欲望がどのように身体、対象、地位や関係づくりに結びつくのか示し、欲望の地図を描き出していく。社会的にランダムなものはまったくない。むしろ、この広告は、他者とつながりたいというもっとも親密な望みが、容易にわかる権力方針にそってしっかりと組み立てられた教科書のような例である。

(216 ページ)

日本では第1章第2節第2項で紹介したとおり『薔薇族』『くいーん』といった雑誌で男性同士の恋人募集広告がなされてきた。ゲイの雑誌『薔薇族』では男性語が多用され、女

装の雑誌『くいーん』では女性語が多用されているであろうことは想像されるが、しかしながら、これに対する調査はまだできていない。

第2項 ^{ランナウェイ} 暴走仮説

第1章第2節第2項では、同性愛者の男性が恋愛上の戦略として女性語を使用することについて、「男女の恋愛の駆け引きの材料として一般に男性語・女性語が用いられているのを、同様に同性愛者も用いていると見るべきである」と述べた。男女の言語形式の違いは、この駆け引きに由来する部分があるのかもしれない。たとえば金田一春彦（1988）は、男性がカリブ語を話し女性がアラワク語を話すカリブ人について

（前略）ここには伝説があり、昔ここにはアラワク族ばかりが住んでいたが、カリブ人が侵略して来てアラワク人の女だけを残して、男はみな殺しにした、そのためにこうなったのだという（イエスペルセン『言語』）。こういうところでは、そこの男たちは、さだめしアラワク語を聞くと何とも言えず**ナマメカシイ**感じをもち、また男の子がまちがえてアラワク語を使ったりすると、みんなにカラカワレてはずかしがることだろう。

（38 ページ）

と述べているが、日本語における言語の性差も似たところがある。

孔雀は、雄の尾羽に比べて雌の尾羽は目立たない。このように雌雄で大きく形質が異なることを生物学では性的二型と呼ぶ。この性的二型は雌が好みの雄を選ぶために生じていると言われている。孔雀などの雌が大きな羽根などの生存に役に立たない形質を持つ雄を好む理由には二つの説がある。一つ目はハンディキャップ仮説であり、生存するためには

邪魔なはずの羽根を持っている雄は実はとても強い^{ランナウェイ}ため、生存しやすさの指標となっているというものである。二つ目は暴走^{ランナウェイ}仮説であり、少し長めの羽根を持つ雄は生存に有利であることから雌が長めの羽根を持つ雄を選ぶようになり、それを繰り返すうちに雄の羽根が無駄に長くなるというものである（佐倉、1995）。

生物学においてどちらが正しいかは不明であるが、言語の男女差の発生はこの暴走^{ランナウェイ}仮説に近いモデルで説明できるかもしれない。つまり、より男性的あるいは女性的な形式が異性に好まれるためにそれが用いられるようになり、それを繰り返すうちに言語の男女差が激しくなると考えられるのである。生物の進化ならば、後天的な形質は遺伝しないから変化に長い時間がかかるが、言語の変化は後天的に学習したことが次の世代に継承されるから、より柔軟かつ急速に変化すると考えられる。

第3項 文末形式

第2章および第3章のそれぞれ2節では、一人称代名詞について調査した。これは日本語におけるジェンダーの影響が大きいのが一人称代名詞と文末形式であると考へたためである。それではなぜ文末形式について調査しなかったかといえば、単にその分類の方法が恣意的になりかねないと考えたからである。というのも文末形式は全ての文にあるためデータも膨大になるであろうし、ある文の内どこからどこまでを文末形式と見るのか（すなわち、最後の単語一つについて調べるか、それとも連語をも調べるか、あるいは文節全体を調べるか）も簡単には決められない。その組み合わせにも男女差があるだろうと考えられるからである。

しかしながら、ジェンダーの影響は一人称代名詞よりも文末形式により強く出るとも考

えられる。そこまで調査の対象を広げたいところであった。

第4項 実際の男性の女性語使用

本研究においては、その調査の対照を小説等の書かれたものに限った。したがって、実際に話されたものについてはわずかに、河野（2008）の研究を通して現代のTVにおける（したがってある程度演技があった）発話や、三橋（2008）らの著作を通して女装者らの発話を見た程度である。実際に、ゲイバーなどで女性語を使用する男性を観察すれば新たな知見が得られるであろう。

第2節 まとめ

以上、男性による女性語使用について見てきた。本論文により、男性が女性になりすますために女性語を使うことが、明治30年代にはあった可能性が極めて高く、昭和前期には確実にあったことを示すことができたと思う。

役割語の概念を提唱した金水敏（2003）は次のように述べる。

役割語の知識は、日本で生活する日本人にとっては必須の知識であるが、役割語の知識が、本当の日本語の多様性や豊かさを覆い隠し、その可能性を貧しいものになっている一面、あるいは、役割語の使用の中に、偏見や差別が自然に忍び込んでくる一面に気づかなければならない。たとえば〈アルヨことば〉は、戦前の、中国の人々に対する偏見に満ちたまなざしとともに用いられていたことを知っておく必要がある。現在の漫画で用いられる例を見ると、悪意も屈託もないようには見えるが、しかしそもそも不完全な日本語＝ピジンしか話せないかのように描写されたとき、描写された当人はどんな気持

ちがするかということを考えるべきである（アメリカ映画に変になまった「ジャパングリッシュ」をしゃべる、めがねをかけた背の低い日本人が出てきたときの気持ちを思い出せばよい）。

(203 ページ)

すなわち役割語には偏見が潜み差別を生む危険があるというのである。事実、女性語を用いる男性は時として嘲笑の対象ともなりかねない。それは彼らが「普通の男性はこう話すべき」というある種の役割語の枠組みから逸脱しているからである。

しかしながら、本論文で述べたいいくつかの例のように、ある程度の男性は、それにもかかわらず戦略的に女性語を用いる。相手に自分が男性であることを悟られない場合でなければ、それは当然自らを差別に曝しかねない危険をも孕んでいる。それでも女性語を使用するのは、ある場合においては矢部道任のように計算づくの戦略であり、別のある場合においては愛子や現在の同性愛者のように性自認や性指向など自らが生得的に持っている特徴が社会との関りの上で不利となるのに対するあらん限りの抵抗でもある。このような、生得的特徴が不利となるような社会構造それ自体は、当然問題であるにしろ、そう簡単に改善されるものではない。

本論文は男性の女性語使用について言語学的事実を報告するに留め、その抵抗を社会の中でこのように行うことの是非については論じない。しかしながら、強かに自らの性のありようを表現する異性形式の使用には大いに感じさせられるものがあることのみは、ここに記しておく。

註

- *1 新宿二丁目。世界有数のゲイ・タウンである。
- *2 同性愛者の男性のことを俗に「ノンケ」という。
- *3 生まれつきの女性のこと。
- *4 「ジャックの談話室：ノンケにモテる方法、教えます」<http://jack4afriic.exblog.jp/2450090/>
(最終アクセス: 2010年12月20日 UTC+9)
- *5 スラッシュ / は改行。鍵括弧「」は会話文。小括弧（）は心中思惟。大括弧 [] は手書き文字。
- *6 イオタ i は汗記号。
- *7 これと似た用例の古いものでは『エロ・グロ男娼日記』（1931）の「（前略）見ちがえるほど美しくなった僕、いやさ、あたしが（後略）」があるが、これは誤って「僕」と言ってしまったのを「あたし」と言いなおしたものではない。第3章第2節第5項 b-2 参照。
- *8 中村の推測では、A、J、K はそれぞれマツコ・デラックス、美川憲一、三輪明広である。
- *9 すなわち、同性愛者の男性は自分が男であることよりも自分が男を愛することを優先し、同性愛者の女性は自分が女を愛することより女であることを優先するために、同性愛者の男性は女性語を使用するが同性愛者の女性は男性語を使用しないというのである。
- *10 椿姫の従姉妹。
- *11 現在の朝鮮民主主義人民共和国平安北道義州郡のあたりであろう。

参考文献

Cameron, Deborah and Kulick, Don *Language and Sexuality* Cambridge University Press, 2003.

(中村桃子・熊谷滋子・佐藤響子・クレア=マリイ (訳) 『ことばとセクシュアリティ』

三元社、2009)

河野礼実「テレビにおける男性の女性語使用——いわゆる「オネエ言葉」について」『国文』

(109) pp.112-100. お茶の水女子大学国語国文学会、2008

木村義之・小出美河子編『隠語大辞典』皓星社、2000

金水敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店、2003

金田一春彦『日本語 新版 (上)』岩波書店、1988

礫川全次・田村勇・下川耿史・畠山篤『女装の民俗学』批評社、1994

小林千草『女ことばはどこへ消えたか?』光文社、2007

佐藤響子「6 恋愛小説——ことばでつくる親密な関係性」中村桃子編『ジェンダーで学ぶ

言語学』 pp.107-121. 世界思想社、2010

佐倉統「進化」フランク・B・ギブニー編『ブリタニカ国際大百科事典 9』ティビーエス・

ブリタニカ、1995

椿姫彩菜『わたし、男子校出身です。』ポプラ社、2008

永井壮吉『荷風全集 第二十巻』中央公論社、1951

永野賢「女性語」国語学会編『国語学辞典』東京堂出版、1970

任利『「女ことば」は女が使うのかしら?』ひつじ書房、2009

伏見憲明「オネエ言葉の逆作用（戦後検証-2-失言の肖像〈特集〉）」『思想の科学 第8次』

(29) pp.54-58. 思想の科学社、1995

松村明監修『大辞泉』小学館、1995

松村明編『大辞林』三省堂、2006

三橋順子『女装と日本人』講談社、2008

山田美妙著、柳田泉・塩田良平・小泉荃三編『美妙選集』（上下）立命館出版部、1935

米川明彦編『日本俗語大辞典』東京堂出版、2003

早稲田大学図書館編『明治期刊行物集成文学言語総目録』（上下）雄松堂出版、1996

参考資料

「"闇の男"現る 又も銀座で刑事に秋波」『読売新聞』（1937年3月28日）

流山竜之介『エロ・グロ男娼日記』三興社、1931（国立国会図書館のマイクロフィッシュ
を利用）

東村アキコ『海月姫①』講談社、2009

やぶうち優『少女少年 III—YUZUKI—』小学館、2000

山田美妙『慨世志士 女装の探偵』（前後）青木嵩山堂、1902

吉住渉『ミントな僕ら【1】』集英社、1998